

和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷三

71
259

大日本教育會館			
一	四	一	一
冊	號	架	函

函一
架一
號

頁
丁
一

K110,1
39
3

版 權 免 許

田中芳男閱正

河村與一郎編輯
櫻戸玉緒校字

和漢脩身書

明治十五年
十月刊行

文求堂藏版

和漢脩身書卷三

田中芳男閱正

河村與一郎編輯
櫻戸玉緒校字

第一章

○ 師之法を學ぶ。人の模範を以て。

○ 吾人をして善くせしむるを欲す。師を以て

は孰く愛敬し。禮父母と道

を同しとせよ。

童子習

景苑

和漢脩身書卷三

晉樂
語共子

○民無三に生れ之小事ふ也一
如く父之を生ふ師之を愛へ君
之を食ふ父に能く親を生ず
食ふ所は斜き長甘次。愛ふ能は
世を知らぬ。

礼記

○父慈子孝。兄良弟弟。夫義婦聽。長
惠幼順。君仁臣忠。士有者之守人義

童子
習

と謂ふ
○親或は疾は
きは必射之に
侍。或は痛或
を瘳。必之を搔
抑。診候湯藥。
急に良醫は須



和漢書

つ。飲を問ふ。食を問ふ。意は曲け思
に従ふ。

○ 親不事ふは方。愛敬兼至り。務
了其心に従ひ。務言其志を樂しむ。
非禮を踏ふ。以言親乃憂を貽ふ。勿
令惡言發。辯にしむ。以親の羞を
返す勿き。

全

全

○ 凡父子執。師範官負。郷里は尊宿
に見ゆは。恭敬を同一くせし。

第二章

○ 天行無健。君子以言。強免息は
次。

○ 人息ふと。我學ふ。人倦むと。我
勤免。且誦。且思ふ。以言其義。故解へ

童子
習

易經

慎思
録

○人生を以て學を以て終と。生を以て
に同じ。學を以て道を知られと。學は
比るに同じ。

全

○學者は須らく孝弟謹悛を以て
先とし。次は聰明を開發す
不致以言當務の急とし。

宇多
天皇
御誠

○治政有識に訪ひ。道を六經ふ求
む。

宋真
宗勸
學

○男兒平生は志を遂げんを欲せば。
六經勸めし。宮前に向ひ讀む。

求是
論

○善を培ふ難しといへば。力字
用ひ字之に培ひし。何れ善く滋ら
さるべき。惡を去らば。善く成る。

力は用はる。之を去らば。何の悪も
盡さらん。

○ 樹の長き枝を欲きは。必始生
時ふ於言。其繁枝を刪去。徳の盛ん
なふを欲きは。必始學を時ふ於言。
夫外好を去る。

○ 善に後ふを登る。如く。惡に従

全

國語

ふる崩はるごとし

○ 尺蠖の居る枝を。信人をも求む
はまら。電蛇は蟻を食む。以て身は
存まらかり。

○ 父は糟糠を甘んじ。子も膏粱に
飽き。孫も遺糧を拾ふ。言ふも。諸公
愛勸に得ず。古語を彼樂ふ喪ふ。

易經

産語

養生訓

原憲語

慎思錄

○萬事勤力言。止と或は誇りあり。譬へは。春種田中。夏蓄之。養ふ人。必^ス秋^ニ刈^ル。多^ク如^ク。○財を^シ之^ヲを貪と謂ふ。學は^シ之^ヲ行^ハふ。能^ハ之^ヲを病と以^フ。○人生而歳亦満た^ス。豈放蕩^シ。一日を曠^ク。空^ク之^ヲ斯生を過^ス。

公惜事さるるをんや。

第三章

童子習

全

○人の人^ニを^シ。全^ク禮^ニに^シ。儀^也。理^則に^シ。以^テ尊^ク。以^テ貴^ク。○群兒狂^ク。以^テ奔^ル。如^ク母。我^ト規^矩を^シ守^ル。群兒喧^シ。我^トを^シ。我^トを^シ。黙^シ。語^ラ。我^トを^シ。

全

○或を相争ひ言ふと云。我口愚を
及如く。或を相闘ひ撃とと。我手拘
を及如くせよ。

○人書信を附きは。開拆沈滞夫へ
うら及。人を並坐し。人乃私書紙
窺ふへうら及。人家ふ入る人紙文
字紙看る幣うら及。

宋范
益議
銘右

全

○凡人乃物を借る。損壞し還さ
ぬへうら及。凡飲食紙喫を及に棟
指去取を及うら及。人と同く之處
ゆふ。自ら便利を指ふるうら及。人
を富貴を見。嘆羨紙毀と人うら
及。

第四章

易經

○言行を君子の樞機。樞機は發を榮辱の主たり。

書經

○言汝の心不逆ふと云ふは必之。正道を求む。言汝志不終ふ。正道を非き。求む。免む。

論語

○徳ありものは。必言あり。言あり

中庸

者も。必し徳あり。見は。

○言行を顧み。行を言にかたり。見は。

孟子

○言礼義を以て。吾身仁に居り。義に由る能ふ。之を自棄せり。

宋張子厚東銘

○戲言と思ふより。出で動も謀る。

唐魏
微言

与り作る。

○言と行と能く合ふ言信なり。言
はなり。令と従と合はる。令誠
申けきはなり。

從政
名言

○喜に乗ると多言を爲らば快
に乗ると事と易と合はる。

太田
持賢
語

○言を慎むれば身は過を思ふ

大和
俗訓

言を過に思ふは言をよき事
法をよきものなり。

○言語容兒多。内外能く見ゆは
符なり。言と兒を見聽ふ。其内心の
善悪知易し。慎むべし。

全

○人衆を誇らば。我身の罪を
知る。人衆を怨むれば。若

身に過る者多し。諸侯に過る者。我徳に害あり。若し家身に過る者は。諸侯に過る者。固く其理を能く言ふ。言ふに及ばず。

第五章

易經

○善は作せば。之は百祥を降し。不善は作せば。之は百殃を降す。

全

○小人は小善を以て益とす。益を以て爲るは。小悪を以て傷みとす。益を以て爲るは。故に悪積るを掩ふ。かゝるは。罪大なり。言解へり。

全

○積善の家には。餘慶あり。積不善の家には。餘殃あり。

孟子

○仁は不仁に勝つ。猶水の火に勝

孔子家語

清々如也。

○善人を居る室。芝蘭の室に入れば。久しう経ても。其香を聞かざる。不善人を居れば。鮑魚の肆に入れば如し。久しう居れば。其臭を聞かぬとも亦之れ化也。

左傳

○好んて過を去るは。惡んて善を

韓詩外傳

去るは。去る義を經たり。

○官を有成ふ怠り。病を小愈ふ加ふ。禍を憐愍に生じ。孝を妻子に衰ふ。此四者を察し。終を慎み。其おと始免る如く也。

○貴賤常あり。唯人の達る所。苟と善あるは。則ち匹夫の子も王公に

明子姚誠子信吳

官箴

慎思 録

玉海有之。苟も不善ふれば。則王公
孔子云。及之。凡庶とある。

○百種に姦偽を。一實に志う。故。反
覆變詐を。始末を慎しむふ。一の
人を防た。衆を疑ふ。自慎に。か
る。智數周密を。事官者に志う。故。
○情慾に萌。其は。知甚た。微事也。

故に之を制し
易し。後來
陷溺に久し。記。
其不可不知
といへ。聖も。之
に克能す。故
小之を小し。制



世より其を。則其大を奈んと悔しむ
ふし。

全

○欲ふ克く小別を以て其を侮む。須く
猛將の敵を。塵埃不如く寸草。

大和
俗訓

○人の我を去らざるを。人其愚を
侮む。我過にあらば。憂をす。常可
死に。人其苦惡を。去らば。死に。我愚

有らば。自ら恥ぢ。

全

○人其過を去らば。不善阿ふ。其
し。世免はらば。其し。必
人其怨と知ふ。

全

○善を去らば。人其誅を。あそ。其
む。善を好む。其誠を。其
有らば。小人財と色と。好む。人

の傍をうへりみれば。是好免るの誠
の貌とあり。

二

○善を求むるも。心は。譬へて。死
色を。求むる。如く。悪を。嫌ふ。あ
らざる。真に。知らざる。如く。を。所す。

第六章

管蒙
文草

○尸素を天其鑑を棄て。充盈を鬼

中興
鑒言

其家に見ゆ。

○天下は本を身に取。身は本を
心にあり。唯。能く其心を害す。唯
奢る。其身は敗る。

慎思
録

孟子

○煩を厭ふ。是人の大病。是以
人事廢弛。功業を成し。所事也。
○人鶏犬を放し。不為。則之を

從政
名言

以己に畏はるるは、彼を割るる
を以て小慎しむるは、大に懼る
を。近ふ戒しむ者も、遠ふ後ら
○下に待たぬ。固より當に謙和素
源あり。福和ありて節を少く、反
て其悔を納はる。

全

○人を感せしむる能はるは、皆

全

誠の未だ至らば累なり。

○事を聞き喜ぶは、驚かさぬもの
以て大吏に當はる。

全

○人當に自信自守を極む。之を稱
譽し、之を承奉は、空しく。亦之
を為喜を加ふ。之を毀謗し、之を
侮慢は、以て常とも。亦之を為沮を

全

加_レ_レ_レ禮。

○恭_レ_レ_レ。諛_レ_レ近_レ_レ。和_レ_レ。流_レ_レ至_レ_レ。上_レ_レ事_レ。衆_レに處_レを_レの_レ道。

慎思錄

○理_レ欲_レを_レ兩_レ立_レ甘_レ。終_レ_レ彼_レを_レ主_レ中_レ。以_レ字_レ常_レに_レ敬_レ畏_レを_レ存_レ。須_レ史_レも_レ道。

故_レ離_レ去_レへ_レつ_レつ_レは_レ衆_レ所_レあり。

第七章

詩經

○初_レ阿_レく_レは_レ衆_レと_レ和_レ。克_レく_レ終_レあり_レ。古_レ中_レ鮮_レふ_レ。

書經

○無_レ益_レを_レ作_レく_レ。有_レ益_レを_レ害_レせ_レく_レ。功_レ乃_レ成_レ。異_レ物_レを_レ貴_レひ_レて_レ。用_レ物_レを_レ賤_レし_レて_レ。民_レ乃_レ足_レる。

孔子家語

○幼成を天性の如く。習慣と自然
孔如し。

漢賈誼言

○前車は之に法うる事。後車は之に
戒む事。前事をあきらめしむるは。後事
の師。

韓詩外傳

○嗜慾後まは。則ち行虧け。終毀行を
成まは。則ち害成は。患と忿怒に生じ。

世説

北朝孫子遊語

禍を纖微に起は。汗辱を滿溢し。可
た。敗失復追ふは。深念遠慮を失
まは。後悔をとも。何益あらん。
○人の及むは。不古と。何益を。情を
以て怒ま。福を。怨意相干は。理法以
て。遺る事。

○膽を大なるを欲し。心を小なる

欲を。智と圓字は欲。行と方
形字を欲也。

後梁
王彦
章言

○豹を死して皮を留め。人生死し
て名留とく也。

明王
陽明
說

○人仁心在理。心體本自弘
毅。弘者広さ也。冬之を蔽はるるを
弘。毅者たけなも也。之字累をきく

管家
文章

あり。

○皇天無誠字貴以了。物取たはせ
以て。臣子之道の為ふ。身の多
免に甘んず。

熊澤
了介
語

○名聞深し。誠を之。利欲
厚し。義字一言以。

大和
俗訓

○平生の氣象を。従容と志川に

家道訓

和樂を以て常し。輕平急迫を以て可
らず。

○年弱老を以ては。常とて力有る
も。世變を志らば。知慧熟きは難し。
老人は愚を多に及ぶ。

第八章

○黄金の理を辨了れ。則ち侈儉を

管子

晋東
哲説

知保。侈儉を以て是は。財百用節あり。

○能く其財を約にすれば。則ち儉石
能く蓄を以て富あり。苟く其欲を肆
にすれば。則ち水陸乃積を足らば。

○寶を貧に生じ。知を論不明るを
聖。

○わが家の生業を法と為す。財を

熊澤
了介
語

家道
訓

生後教の本と。又儉約を行ふと。財を保法道と成。

○思を少くして。神を存し。徳を少くして。氣を養ふ。飲食を少くして。胃を安んず。言を少くして。心をおさる。和漢修身書卷三終

五

版權免許

明治十五年十月七日
同年同月刻成發兌

定價七錢

編輯者

京都府平民

河村與一郎

上京區第六組西三防堀川町五百十九番地

出版人

京都府平民

田中治兵衛

下京區第五組寺町原七交寄町六番地

發兌人

大阪府平民

柳原喜兵衛

大阪東區北久太郎町四丁目十五番地

和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷四

71
259

大日本圖書				東 新書門 3
一 〇 册	四 號	一 架	一 八 函	
册				

K110.1
39
4